巻頭言

留学生センター長　五味政信

留学生センターと大学院言語社会研究科の合同棟「国際研究館」（６階建て）が本年４月に竣工し、センターはその１階と２階に留学生課とともに移転した。建物は煉瓦色スクラッチタイルの外壁が上品で、周囲の桜、赤松の大木の緑と調和している。建物の入口は３階までの吹き抜けとなっており、開放感を体いっぱいに感じながら建物に入ることができる。入ってすぐ左手には、留学生・日本人学生の交流の場、国際交流ラウンジが確保されている。多くの留学生、日本人学生が集い、語り合い、時に笑顔と歓声が拡がり、時にノートを広げて教え合う姿を目にする度に、この国際研究館が研究と教育、そして交流の性格をも兼ね備えた建物であることを再認識させられる。屋上には太陽光発電装置が設置されており、発電量掲示板がこの国際交流ラウンジの壁に掲げられている。「ただいまの発電量6.3KW」などの文字が目に入ってくると、ささやかながら省エネ、環境にも配慮した建物であることを喜ばしく思う。１階のCAI自習室が本格的な稼働を開始すれば、言語関連分野を学ぶ大学院生と日本語を学ぶ留学生との交流も一層拡大、深化するものと期待している。建物建設のためにご尽力くださった学長はじめ、大学執行部、事務局の方々、そして文部省留学生課に心からのお礼を申し上げる。

本学の日本語教育は、この十年余、人文社会科学専攻の留学生に対する専門日本語教育を研究教育の中核の一つに据えてきた。今後もこの方針を堅持し、専門日本語教育分野の研究教育をはじめとして、その教材『学術日本語シリーズ』の刊行にも力を注いでいきたい。本年度からは、初級と中級をつなぐための、専門日本語教育を視野に入れた『初中級日本語テキスト』の開発に着手しようとしている。初級から中、上級まで一貫性を備えた専門日本語教育の、一層の効率化を目指すことになっている。

ここ数年、本学においても国際交流、日本語教育の状況は大きく変化している。学生交流協定校からの交換留学生が増加し、さらには学術交流協定校からの留学生受け入れ、半年単位の交換留学生の受け入れなども視野に入って来た。この十年余に経験して来た留学生の多様化が一層進んでいるし、これからも速度を速めて進んで行くのは間違いない状況となっている。また一方、独立行政法人化問題など国立大学を取り巻く状況は急速に変わろうとしている。「留学生十万人計画」の2010年度達成といった新たな展開にも対応を迫られるであろう。留学生のますますの多様化に柔軟に対応し、大変革期にある大学の中でのセンターの位置を見極めつつ、教育研究環境の改善が実現した国際研究館を有効に活用し、国際交流の最前線に立つ部局としての役割を果たしたいと考えている。

本学は今年、創立125周年を迎える。来世紀に一層の飛躍を期し、新たな大学像を模索し

つつ、議論が積み重ねられているが、留学生センターは大学の将来像の中で、どのような貢献を為すべきか、為すことができるのか、今後とも真剣に話し合ってゆきたい。

留学生センター兼務教官の田中宏先生（現龍谷大学教授）はこの３月末をもって社会学部教授を退官された。先生は外国人問題・留学生問題についての幅広い知見をもって、センターの「ご意見番」としてわれわれを温かい目で見守ってくださった。また、松岡センター長が在墺研究の半年間、センター長代理を務められた。歯に衣着せず正論を展開し、物事の筋を説く先生の語り口と真率な人柄を思い浮かべつつ、編集委員会は本紀要で先生の特集記事を組んだはずである。あらためてお礼を申し上げるとともに、新たな職場でのご活躍とご健勝をお祈りしたい。

センター生みの親の松岡弘先生（現社会学研究科教授）はセンター設置の準備段階からの中核的存在で、設立後の４年間、初代センター長としてセンターの揺籃期に規則整備から実際の運用面まで、強力なリーダーシップを発揮され、円滑にセンターを運営してくださった。また今でも先生は本学で日本語教育、留学生教育に携わる者にとっての精神的支柱でもある。私のPCには「松岡語録」というファイルが設けられ、留学生教育や留学生センターのあるべき姿などに関する、先生のことばが打ち込まれている。この４月よりセンター長のバトンを受け継いだわけだが、先生が築かれた、一橋大学の留学生教育・日本語教育の継承・発展を目指し、本学にふさわしい留学生センター作りに取り組み、微力ながらこの重責を全うできればと願っている。

センターには現在６名の専任教官が在籍し、また７名の教官に兼務教官をお願いしている。今後組織の充実をはかり、留学生教育、日本語教育、そして国際交流に取り組んでいかねばならないが、学内での他部局との連携協力が必要不可欠である。特段のご理解、ご支援をお願いする次第である。

2000年８月